

White Paper

SAP ランドスケープの最新化に必要なのは、ハイブリッドクラウド、クラウドネイティブアプリケーション開発、自動化を実現するオープンソースプロバイダー

Sponsored by: Red Hat

Greg Macatee

February 2024

Peter Rutten

IDC の見解

どの業界でも企業は、地政学的な緊張の高まり、世界的な経済変動、高金利、インフレ、運用コストの増加、持続可能性の問題、厳しい規制要件など、事業を成功させ収益を上げていく能力に影響を与える多くの要因に直面している。同時に、活用するテクノロジー、開発する製品やプロセス、事業を展開する競争環境、参加する地域経済など、さまざまな面で絶え間ない変化に対応し、利益を守らなければならない。

影響を与える要因がダイナミックに混在する中で、ビジネス目標をより適切に達成する方法の一つは、事業運営のベースとなる全社的なリソース管理環境の最新化である。SAP ソフトウェアを使用している企業にとって、これはハイブリッドクラウドモデルの SAP HANA と SAP S/4HANA への移行を意味する。こうした最新化によって、さまざまなリアルタイムのビジネスデータを予測し、それに基づき行動する新たな機会が生まれ、企業のビジネス目標はさらに積極的かつ包括的に前進する。

このような取り組みを開始する場合、SAP ランドスケープのオープンソースプロバイダーがランドスケープの管理に重要な役割を果たすことを、企業側が認識している必要がある。運用を中断せずに SAP ランドスケープシステムを最新化するのには、リスクを伴う困難な作業である。通常、企業は複数のステップからなるプロジェクトに着手する。プロジェクトには 3～18 か月かかり、インフラストラクチャの選択、オペレーティングシステム (OS)、クラウドかオンプレミスかなど、複数の決定が必要となる。この過程で、SAP ランドスケープのオープンソースプロバイダーが重要な役割を果たすため、オープンソースプラットフォームの選択を慎重に評価する必要がある。

オープンソースプロバイダーは、顧客が高可用性を実現しつつ、効率よく安全に、規制に準拠した方法で SAP を実行できるようにしなければならない。ハイブリッド環境全体で自動化しながら、顧客が SAP インフラストラクチャを簡単かつシームレスに管理できるようにする必要がある。また、顧客側で SAP の side-by-side アプリケーションの開発、展開、管理ができるよう、開発者には SAP 機能の革新と拡張に必要なものを提供しなければならない。

さらに、企業は、迅速な展開と変更管理、ダウンタイムの防止、ハイブリッドクラウドのシンプルさ、ガバナンス管理、ポリシーベースの制御、セルフサービス機能、さらにはオンプレミスであっても、クラウド内であっても、あるいはその両方（マルチクラウドを含む）であっても、均一で管理しやすい環境など、さまざまな能力も求める必要がある。

IDC は、SAP ランドスケープの標準化、自動化、最新化のために、企業がこうした能力に関して Red Hat を検討するもっともな理由があると考えている。

概況

IDC は、2024 年までに IT の支出全体の 50% がデジタルトランスフォーメーション（DX）とイノベーションに費やされ、企業の 50% 以上が自社の DX 戦略を実現するためにマルチクラウド展開を活用すると予測している。さらに、SAP HANA と SAP S/4HANA はコンテナ化されないにしても、2024 年までにすべての新しいアプリケーションの 80% がコンテナとして展開されるだろう。この入り交じった根本的な変化の中で、SAP の顧客は、重要な SAP ワークロードが最もシームレスかつ一元的にビジネス価値を提供し続けることを確実にする必要がある。

過去数年間、SAP は顧客に SAP HANA と S/4HANA への移行を促しながら、何百もの製品を革新してきた。さらに、同社は、SAP 環境と非 SAP 環境の統合により重点を置きつつ、ソリューションに適した展開戦略としてマルチクラウドを推進している。SAP TechEd 2023 で、SAP は堅牢なマルチクラウド戦略と、Amazon Web Services（AWS）、Google Cloud Platform（GCP）、Microsoft Azure などの大手クラウドサービスプロバイダー（SP）とのコラボレーションについて説明した。CIO と CTO にとってこれは、自社の DX の取り組みの一環として、SAP 戦略に関して複合的な可変要素を検討する必要があることを意味する。こうした決定の一つは、SAP ランドスケープのオープンソースプロバイダーに関係する。IDC は、以下の 3 つの基準に基づくプロバイダーの選択を推奨する。

- **データセンター効率化とハイブリッドクラウド管理。** 迅速な展開と変更管理、ダウンタイムの防止、ハイブリッドクラウドのシンプルさ、ガバナンス、ポリシーベースの制御、セルフサービス機能の観点から。
- **統合と新しいソリューションの開発。** SAP 機能の革新と拡張に必要なものを開発者に提供する観点から。
- **自動化。** プロビジョニング、アプリケーションのライフサイクル管理、ネットワーク運用など、SAP 関連のエンタープライズ IT 運用を自動化する能力の観点から。

以降のセクションでは、これらの要件についてさらに詳しく検討する。

SAP 用オープンソースプロバイダーを選択する際の検討事項

データセンター効率化とハイブリッドクラウド管理

企業は、迅速な展開と変更管理、ダウンタイムの防止、ハイブリッドクラウドのシンプルさ、ガバナンス、ポリシーベースの制御、セルフサービス機能など、さまざまな能力を求める必要がある。おそらく、企業はコストが削減できるやり方で複数の事業ユニットに渡る業務を合理化して、オンプレミスでも、クラウド内でも、あるいはその両方（マルチクラウドを含む）でも、異質性が低く管理しやすい環境を実現したいと考えるだろう。オープンソースプロバイダーに期待される重要な支援には以下のものがある。

- **ハイブリッドクラウド環境へのサポート。** ハイブリッドクラウドプラットフォームを利用することによって、企業は、展開すべき SAP のコンポーネントを選択した上でオンプレミスとパブリッククラウド環境全体でアプリケーションを実行する柔軟性が得られる。たとえば、SAP アプリケーションとデータベースをパブリッククラウドとオンプレミスで実行できる。IDC は、企業において、SAP ランドスケープとしてのハイブリッドクラウドプラットフォームの活用が進んでいるとみている。したがって、オンプレミスとパブリッククラウドによって構成されるハイブリッドクラウド環境をサポートし管理する機能は、基盤となる OS に求める重要な要求事項となる。
- **データセンター内の一貫性。** 企業は、ベアメタルサーバーまたは仮想サーバーからプライベートクラウド、ハイブリッドクラウド、またはパブリッククラウドのいずれに展開するか

関係なく、運用エコシステムの観点から、自社の SAP 環境のシームレスな移行に役立つ一貫性のあるプラットフォームを実現し、SAP ワークロードと非 SAP ワークロードを調和させて、SAP ワークロードが非 SAP ワークロードと適切に動作し、環境全体を拡張したものとして単純に実行できることを望んでいる。

- **SAP アプリケーションのパフォーマンス。** たとえばサーバーのベンダーと共同開発した最適化などによって、OS を SAP ワークロードのパフォーマンス向上に役立てることが可能になる。
- **高可用性 (HA) とデータ回復。** SAP HANA、SAP S/4HANA、およびその他の SAP アプリケーションは、堅牢な HA と災害復旧 (DR) を要求するビジネスクリティカルなワークロードを実行している。HA を実現する方法は、プロセッサ機能からハードウェア冗長性、クラスタリングやフェイルオーバーソフトウェアに至るまで、無数にある。
- **シームレスなアップグレード、ライブパッチ、修正。** 今日の 24 時間 365 日稼動する世界では、SAP ワークロードに期待されるダウンタイムはゼロに近づいており、ライブカーネルパッチ (システムをオフラインにすることなくカーネルにパッチを当てる) などの機能は、アップグレードや修正を混乱なく、または混乱を最小限に抑えて実行できる機能と同様に、OS の重要な能力である。
- **サーバーの OEM パートナー。** どちらの SAP 用 Linux ディストリビューションも、サーバーの OEM が提供するすべてのソリューションで利用できるが、OS のベンダーが異なれば、顧客にベネフィットをもたらせるサーバー OEM との関係も異なってくる。たとえば、リファレンスアーキテクチャ、最適化、または特定の SAP ソリューションをより広範なオペレーティングエコシステムで実行できるようにすることなどである。
- **OS 上での予測分析。** SAP 環境の継続的な監視は、統合 SAP プラットフォームの自動化とシームレスな管理の基礎であり、セキュリティ、ネットワーク、システム構成、その他のランドスケープ上の問題を防止する。
- **規制コンプライアンス。** 企業には、業種、顧客の種類、地理的な場所などに基づく実質的なコンプライアンス要件がある。このような要件には、特定のセキュリティ認証、暗号化モジュールと暗号化サポートが必要な場合がある。オープンソースプロバイダーは、自動化によってそのような要件をサポートし、コンプライアンスポリシーを設定し検証する簡単な方法を提供できる必要がある。
- **サポート。** 企業はビジネスの継続性を重視する。SAP の展開において、企業は一般的に、複数のインフラストラクチャの抽象化、展開場所、テクノロジーに対処しなければならない。このような環境でのダウンタイムのトラブルシューティングはささいな問題ではない。こうした状況で、企業にとってより適切なサービスを提供するのは、SAP サポートと統合し一元化された連絡窓口である。

統合と新しいソリューションの開発

企業は、データの品質を向上させ、そこから得られるビジネス上のインサイトを豊かにするためには、SAP と非 SAP のアプリケーションとデータの統合が基本だと考えている。AI (Artificial Intelligence : 人工知能) や IoT などの新しいテクノロジーが競争の原動力となる中、企業は統合、オーケストレーション、メタデータ管理、クラウド上の SAP AI Business Services 機械学習との接続を組み合わせ、IT とデータサイエンスチームの協力を支援する、SAP Datasphere のようなプラットフォームを必要としている。オープンソースプロバイダーに期待される重要な支援には以下のものがある。

- **SAP Business Technology Platform (BTP) との統合。** SAP BTP は、データとアナリティクス、人工知能、アプリケーション開発、自動化、統合をオンプレミスからクラウドまで、一つの環境に統合するテクノロジープラットフォームである。BTP は、他の SAP ソフトウェアを実行しているオンプレミスおよびクラウドベースのシステムに接続する Software-as-a-

Service (SaaS) 環境である。OS に応じて、SAP ソリューションを提供するさまざまなクラウド SP から入手できる。

- **コンテナ化。**企業では、SAP の「デジタルコア」に統合された、コンテナ化されたカスタムアプリケーションを展開するケースが増えている。IDC によると、企業の 3 分の 1 近くが、SAP 用のオープンソースプロバイダーのコンテナ化機能を広範囲に使用していると分かった。¹現在、すべての主要な OS はコンテナランタイムとコンテナオーケストレーションプラットフォームをサポートしている。とはいえ、主な差別化要因となる能力は、コンテナ化されたアプリケーションのセキュリティが強化され、GPU など高速化したハードウェアの性能へのアクセスがよりスムーズになるという点である。
- **新しいデータ永続化テクノロジーのサポート。**コンテナ化／クラウドネイティブアプリケーション、マイクロサービスアプリケーション、AI/ML アプリケーションなどの最新のアプリケーションには、従来のエンタープライズアプリケーションとは異なるデータ永続性要件がある。ストリーミングプラットフォーム (Apache Kafka など) とメモリー内データベース (SAP HANA など) にも、特定のデータ永続性のニーズがある。基盤となる OS は、永続ボリューム (コンテナ化されたアプリケーション用)、ログボリュームとデータボリューム (SAP HANA 用)、および高性能メッセージキュー (ストリーミングアプリケーション用) などのさまざまな構成を通じて、このようなデータ永続性要件をサポートする必要がある。

自動化

- 自動化とは、SAP HANA ランドスケープの構成を含めたプログラムによる方法を通じて、プロビジョニング、アプリケーションのライフサイクル管理、ネットワーク運用などのエンタープライズ IT 運用を自動化する能力を意味する。
- 自動化は、環境を中断させずに自動システムソフトウェアアップグレードを実行するためにも重要である。

SAP ワークロード向けに RED HAT を検討する

Red Hat と SAP はその設立以来、協力して SAP ワークロードのサポートを中心とした多数の製品／サービスを構築してきており、ここ数年、パートナーシップをさらに強化してきた。2023 年 2 月、SAP と Red Hat は、SAP の Red Hat Enterprise Linux (RHEL) の活用とサポートを大幅に増強するために、パートナーシップの拡大を発表した。両社によると、このコラボレーションは、インテリジェントなビジネスオペレーションを強化し、業界を超えたクラウドイノベーションをサポートすることで、全体的な IT イノベーションを推進することを目的としている。

SAP ワークロードに Red Hat ソリューションを展開すると、顧客は以下のベネフィットが期待できる。

- **アプリケーションのライフサイクルのサポート：**Red Hat と SAP は、連携して顧客の環境へのサポートを提供する。さらに、SAP ライフサイクル中に RHEL バージョンのアップグレードを計画している顧客は、IT 環境の最新化と RHEL のマイナーバージョンリリースへの更新を計画する際、Red Hat の Update Services にアクセスできる。
- **プラットフォームの標準化：**Red Hat 商用製品の標準化により、顧客は、オンプレミス、パブリッククラウド、またはその他のハイブリッドクラウドおよびマルチクラウド環境で IT 環境を構築または拡張する場合でも、一貫したレベルのパフォーマンスの達成を期待できる。

¹ IDC Special Report: Infrastructure Adoption Trends for SAP HANA and S/4HANA 2021

さらに、SAP ワークロードをサポートする Red Hat 製品はすべて、共通の同じサブスクリプションモデルで提供できるため、顧客は社内で容易に追跡できる。

- **効率的な自動化：**これには、SAP が顧客の RHEL 環境をインストール、構成、管理するための RHEL システムの役割が含まれる。顧客が自社のインフラストラクチャをよりシームレスに自動化できるよう、Red Hat Ansible Automation Platform と併用することも可能。
- **プロアクティブなツール：**RHEL for SAP Solutions には、SAP 用の Red Hat High Availability Add-On と HA ソリューションが含まれる。RHEL for SAP Solutions（および他のすべての RHEL サブスクリプション）には Red Hat Insights も搭載している。これは、ユーザーの環境に対する可視性を高め、SAP のルールとポリシーに従ってリスクと全体的な IT パフォーマンスを追跡できるツールである。
- **継続的な可用性：**Red Hat High Availability Add-On を備えた RHEL for SAP Solutions を使用する顧客は、選択した可用性の高いスケールアップおよびスケールアウト構成で SAP ソリューションを展開できる。さらに、より高いレベルの可用性を確保するために、RHEL には、エンタープライズ OS 環境の更新中のシステムのダウンタイムを防ぐライブカーネルパッチとインプレースアップグレードが組み込まれている。
- **エンタープライズグレードのパフォーマンス：**RHEL for SAP Solutions の顧客が総所有コスト（TCO）を改善し削減できる方法はいくつかある。これには、SAP 固有のパフォーマンスチューニング、PMEM（Persistent Memory：永続メモリー）、File System Data Analysis Expressions（FS-DAX）、Virtual PMEM on IBM Power が含まれる。

SAP 向け Red Hat ソリューションポートフォリオ

過去数年に渡り、Red Hat は、ワークロードをサポートするオンプレミス、クラウド（プライベートまたはパブリック）、またはエッジに展開できる、RHEL、Ansible、OpenShift 上に構築された、強力でありながら動的で柔軟な IT インフラストラクチャプラットフォームというビジョンを企業顧客に売り込み続けてきた。IDC は、特に IT 市場のハイブリッドクラウドとマルチクラウド展開モデルへの移行が進む中で、これは顧客の共感を呼ぶメッセージであると考えている。Red Hat のような企業と連携するユーザー企業は、幅広いスタックの構成要素として機能するために必須の商用インフラストラクチャソフトウェアプラットフォームと必要なサポートレベルにアクセスできるようになり、それが優れた成果を推進し、価値を生み出す。

Red Hat は、企業のビジネス目標をサポートするため、SAP などの他の ISV（Independent Software Vendor：独立系ソフトウェアベンダー）と戦略的に提携し、長年に渡る関係を強化することで、コア製品エコシステムを中心にさらなる構築を続けている。Red Hat の企業としての 3 つの柱は SAP と連動しており、Red Hat のソリューションのポートフォリオを見渡すには、この三本柱をベースにすると最も効果的である。

- **SAP の実行。**すべての環境で従来のワークロードとクラウドワークロードの安全な基盤をスケールアップし、管理し、注視することによって、ハイブリッドクラウドインフラストラクチャを管理
- **SAP の拡張。**あらゆるアプリケーションをあらゆる環境で開発、展開、管理することでクラウドネイティブ開発を可能にし、開発者に革新に必要なものを提供
- **SAP の簡素化。**Red Hat プラットフォームを管理し、ハイブリッド環境全体をスムーズかつ効率的に自動化

SAP の実行

この柱は、マルチクラウド環境全体に、同じ Linux OS 上で SAP ワークロードと非 SAP ワークロードの両方を実行する Red Hat の能力を反映する。

Red Hat Enterprise Linux (RHEL)

RHEL は、Red Hat が提供する旗艦製品であり OS である。IDC の調査によると、RHEL は、売上高で商用 Linux 市場セグメントの主力製品であり、2022 年末時点で約 80% の市場シェアを持ち、非常に大きなユーザーインストールベースを持つ。Red Hat は商用オープンソースソフトウェアのパイオニアとして、この分野で 30 年の経験があり、進化し続ける IT 環境の中で顧客のニーズを満たすための製品の開発と適応において豊富な経験を持つ。

顧客がデジタル化と最新化の取り組みのどの段階にいるかに関係なく、RHEL を使用すれば以下のベネフィットを得ることが期待できる。

- **商用に強化されたソフトウェア：**Red Hat は、RHEL コードが堅牢に動作し、適切に拡張され、期待通りに機能することを確認するために、厳密なコードテストをしている。また、OS を別のコミュニティディストリビューションと比較する際に、RHEL のセキュリティと安定性の追加レイヤーを提供するために、Linux カーネルのオープンソースコードも強化している。さらに、RHEL は Red Hat の他の製品ポートフォリオと適切に統合されているため、顧客の IT 環境のよりシームレスな管理に役立つ。
- **安全で柔軟な IT 基盤：**RHEL は、コアからクラウド、エッジに至るまで、さまざまなハードウェアアーキテクチャ（たとえば Arm、IBM Power、IBM Z、および IBM LinuxONE を含む、x86 系および非 x86 系）に同一の優れたパフォーマンス体験をユーザーに提供する。
- **エンタープライズグレードのサポート：**特にユーザーの IT 環境がより分散され、複雑になるにつれて、エンタープライズグレードのサポートの価値は非常に大きくなる。実際、IDC の調査では、顧客の意見として、Red Hat の商用サポートは同社の重要な価値提案の一つに挙げられている。無料のコミュニティ主導型 Linux と商用 Linux の間の議論が続いている一方で、非商用 Linux ディストリビューションの多くのユーザーは、他の機会コストに加えて環境の管理、更新、パッチ適用に費やすスタッフの時間の増加による暗黙のコストを認識せず、考慮に入れていないことが多い。
- **明確な製品ロードマップと予測可能なアップグレードパス：**コミュニティがサポートする OS エコシステムは予測不可能で、時には大きすぎて扱いにくい場合があるが、Red Hat は古い API との互換性や、他のソフトウェア依存関係を確保しながら、以前の OS ビルドと機能を現在のバージョンにロールフォワードする。RHEL のすべての主要バージョンには 10 年のライフサイクルがあるため、企業は事前に計画を立て、完全に準備が整った場合のみ OS 環境を更新できる。
- **ハードウェア、ソフトウェア、サービスプロバイダーの広範なパートナーネットワーク：**これには、IBM、Dell、Hewlett Packard Enterprise (HPE)、Intel など（ただしこれらに限定されない）さまざまな Red Hat のハードウェアパートナーや、AWS、Microsoft Azure、GCP などの主要なパブリッククラウドサービスプロバイダーが含まれる。

さらに、読者は、すべての RHEL サブスクリプションは Red Hat Insights にバンドルされていることに留意すべきである（Red Hat Insights は、後述する Red Hat OpenShift と Red Hat Ansible Automation Platform 製品にもバンドルされている）。Red Hat Insights を使用すると、運用チームは一元化されたダッシュボードと SaaS インターフェースを通じて IT 環境を分析でき、潜在的なセキュリティリスク、脆弱性、Red Hat フットプリントの設定ミスを特定するだけでなく、ユーザーがパフォーマンスとコストを追跡できるようにするための推奨事項を提供する。

SAP の拡張

この柱は、Red Hat Kubernetes コンテナプラットフォーム上に構築された革新的なビジネスアプリケーションで SAP コア機能を拡張する Red Hat の能力を反映する。

Red Hat OpenShift

Red Hat OpenShift は、コンテナ化されたアプリケーションを構築、展開、管理するためのエンタープライズグレードの認定された **Kubernetes** コンテナオーケストレーションプラットフォームである。Red Hat OpenShift は、さまざまなクラウドサービスプロバイダーでフルマネージドサービスとして利用することも、Red Hat OpenShift Container Platform または Red Hat OpenShift Kubernetes Engine を使用して顧客自身が管理することもできる。Red Hat OpenShift は、オンプレミス、ベアメタルサーバー、仮想化プラットフォーム（例：Red Hat Virtualization、VMware、または Red Hat OpenStack Platform）上に、または AWS、Microsoft Azure、GCP といった主要なパブリッククラウドサービスプロバイダー上に展開できる。さらに、セキュリティポリシーを組み込んで一元化したコンソールから複数の Red Hat OpenShift クラスターとアプリケーションを管理するために Red Hat Advanced Cluster Manager for Kubernetes が使用でき、それによって顧客はオープンハイブリッドクラウドを利用できるようになる。

Red Hat OpenShift Container Platform は、Red Hat OpenShift Virtualization を介してコンテナ化されたアプリケーションおよび仮想マシン（VM）の展開と管理をサポートし、Red Hat Virtualization プラットフォームと統合されている。Red Hat OpenShift Container Platform は、完全な RHEL OS または RHEL CoreOS と呼ばれる小規模なコンテナ指向 OS を使用する柔軟性も提供する。

商用サポートされている **Kubernetes** ディストリビューションの強みをマイクロサービスアーキテクチャ、コンテナ化、SAP の将来のデジタルエンタープライズの DevOps モデルにもたらすことで、企業は、データセキュリティ、プライバシー、保護のニーズに応えるために、分離されたデータ、ストレージ、ネットワーク環境を備えた独自の Red Hat OpenShift Container Platform インスタンスを活用してベネフィットが得られる。

SAP の簡素化

この柱は、Day 1 と Day 2 オペレーション用に **Ansible Automation** を活用して SAP ランドスケープを実行し維持する Red Hat の能力を反映する。これには、S/4HANA のクラウドへの移行を容易にすることを目的とした、クラウド対応インフラストラクチャソフトウェアプラットフォームである RHEL を備えた Red Hat の RISE with SAP スイートも含まれる。

Red Hat Ansible Automation Platform

Red Hat Ansible Automation Platform は、リソースのプロビジョニング、アプリケーションのライフサイクル管理、ネットワーク運用など、エンタープライズ IT 運用のさまざまな側面のスケラブルで安全な自動化を可能にする。これは、**Ansible Engine**、**Ansible Tower**、および **Ansible Hosted Services** で構成されている。Red Hat ポートフォリオの他のすべての製品は、Red Hat Ansible Automation プラットフォームを使用して統合できる。さらに以下の特徴を持つ：

- Red Hat Ansible Automation Platform は、インフラストラクチャリソースを展開、管理、保護するためのプログラムによる方法を提供することで、データセンター内の一貫性を実現する。Red Hat Ansible Automation Platform では、コミュニティが「プレイブック」と呼ばれるモジュールを通じてベストプラクティスを共有することもできる。
- Red Hat Ansible Automation Platform は、SAP HANA ランドスケープを自動化するための SAP 固有の役割を豊富に提供する。これは SAP HANA ランドスケープと Red Hat インフラストラクチャの構成を提供する。Red Hat Ansible Automation Platform を SAP ソリューション用 RHEL と組み合わせることで、システムソフトウェアのアップグレードなどの重要な移行を最小限のダウンタイムで自動化できる。

RHEL を備えた RISE with SAP

Red Hat と SAP のパートナーシップ拡大によって、RISE with SAP を Red Hat に展開することを選択した SAP の顧客には、クラウドへの移行（およびクラウド間の移行）を容易にすることを目的とした、高性能かつクラウド対応のインフラストラクチャソフトウェアプラットフォームを提供する。さらに、これらの顧客は、Ansible などの他の Red Hat インフラストラクチャ管理と自動化ツールにアクセスし、RISE with SAP 環境を合理化し、IT 投資の価値を最大限に引き出せる。

RISE with SAP は、SAP S/4HANA への移行とクラウドへの移行の際に SAP 顧客が直面するハードルに対する SAP の対応として、2021 年初めに提供が開始された。このプログラムは、商業的にバンドルされている単一サブスクリプションの契約であり、SAP 顧客のビジネストランスフォーメーションを支援する一連のツール、サービス、ソフトウェアへのアクセスを提供する。SAP S/4HANA への移行を簡素化するように設計されており、企業は SAP S/4HANA の複雑な IT インフラストラクチャの管理を避けられる。

RISE with SAP には、SAP S/4HANA Cloud（SAP S/4HANA の SaaS 版）、テクニカルマネージドサービス、ビジネスプロセスインテリジェンス、SAP BTP、SAP Business Network、およびいくつかの特定業界向けのサービスが含まれる。

課題と機会

企業の課題と機会

SAP ワークロード用のオープンソースプロバイダーの選択は、企業が SAP ランドスケープを最新化する際に下すべき多くの決定の中でも重要なものである。企業は、現時点の OS だけでなく、先を見据えて、SAP ワークロードが実行され、関与するプラットフォーム全体を検討する必要がある。このプラットフォームは、相互運用性、オーケストレーション、および自動化を実現する、プライベートクラウド、ハイブリッドクラウド、パブリッククラウド、およびマルチクラウドのための包括的なプラットフォームでなければならない。

Red Hat の課題と機会

Red Hat は、SAP 市場で競合する一社との競争に直面しており、その競合他社も SAP と緊密に連携している。しかし、Red Hat と SAP のパートナーシップ、そして、SAP BTP をクラウドでの新しいアプリケーションの開発、統合、拡張用のデファクトプラットフォームとして位置づけようとする SAP の取り組みを含めた SAP のクラウドへの推進力は、Red Hat の OpenShift プラットフォームを考慮すると、Red Hat にとって大きな機会となる。SAP と Red Hat の両社、そして最終的には両社の共通の顧客がこうした展開からベネフィットを得ることになる。

結論

企業の SAP ランドスケープのオープンソースプロバイダーは、企業がデジタルトランスフォーメーションの一環として SAP 環境を最新化する方法の重要な構成要素である。

企業は、オープンソースプロバイダーを利用することで、SAP ランドスケープをベアメタルサーバーや仮想サーバーからプライベートクラウド、ハイブリッドクラウド、またはパブリッククラウドに移行するための一貫したプラットフォームが提供できること、SAP HANA または SAP S/4HANA のオペレーティングプラットフォームによってパフォーマンスが向上すること、SAP BTP と統合できること、堅牢な HA と DR を実現できることを確認する必要がある。

オープンソースプロバイダーは、シームレスなアップグレード、ライブパッチ、修正、強力なリファレンスアーキテクチャと最適化、セキュリティ、ネットワーク、システム構成の問題を防止するための予測分析、活用とリソース統合のための仮想化テクノロジーも提供する必要がある。

そして最後に、オープンソースプロバイダーは、スケーラビリティと運用効率を高めるためのコンテナ化、高速化されたハードウェアへのセキュリティアクセスの強化、オンプレミス、パブリッククラウド、マルチクラウド全体で **SAP** アプリケーションを実行するためのハイブリッドクラウドプラットフォーム、新しいデータの永続化テクノロジーとソフトウェアデファインドストレージのサポート、規制コンプライアンスの完全なポートフォリオ、トラブルシューティングサポートのため、共通の連絡窓口も提供する必要がある。

IDC は、**RHEL for SAP Solutions** がこれらの機能を企業に提供する強力なソリューションセットを提供していると考えている。

IDC 社概要

International Data Corporation (IDC) は、IT および通信分野、消費者向けテクノロジー市場に関する調査・分析、アドバイザリーサービス、イベントを提供するグローバル企業です。世界中に 1,300 人以上のアナリストを擁する IDC は、110 か国以上を対象として、世界規模、地域別、国別での市場動向の調査・分析および市場予測を行っています。IDC の分析と洞察は、IT 専門家、企業経営者、および機関投資家が客観的にテクノロジー導入の意思決定を行い、主要な事業目標を達成するのに役立ちます。1964 年創業の IDC は、IDG (インターナショナル・データ・グループ) の完全子会社です。

Global Headquarters

140 Kendrick Street
Building B
Needham, MA 02494
USA
508.872.8200
Twitter: @IDC
blogs.idc.com
www.idc.com

Copyright Notice

IDC の情報およびデータの対外的公表—広告、プレスリリース、または、販売促進資料で用いる IDC の情報についてはいかなるものであれ、適切な IDC のバイスプレジデントまたはカントリーマネージャーから書面による事前の承認を受ける必要があります。係る申請には、提案する文書のドラフトを添付する必要があります。IDC は、その理由の如何にかかわらず、外部での使用に対する承認を拒否する権利を留保します。

Copyright 2024 IDC.Reproduction without written permission is completely forbidden.

